

私塾咸宜園と天領日田

—学びの町の原風景—



史跡咸宜園跡(秋風庵)



咸宜園教育センター

はじめに—なぜ「江戸」なのか

- 江戸時代 265年の「平和」
1603—徳川家康征夷大將軍
1868—明治維新
- 世界が認めた「江戸の文化」
- その基底を支えた「江戸の教育力」



葛飾 北斎(1760～1849)



歌川 広重(1797～1858)



ゴッホ (1853~1890)



モネ (1840~1926)

1 江戸時代の文化と教育力

- 江戸時代の日本は当時の西欧諸国と比べても高い教育水準をもっていた。
- 「江戸の教育力」を支えたのが 諸藩の藩校、私塾、寺子屋などであった。

こどもらの手習い

小林一茶

初雪や

いろはにほへと習い声

雪とけて

村一ぱいの子どもかな

腹上で

字を書き習ふ夜寒かな

一茶は信濃国（現長野県）の
農家の生まれ。幼時から父に
読み書きを習っていた。

日本遺産 近世日本の教育遺産群 2015年認定



日本最大の藩校 **弘道館**(水戸市)



学問教育の源流 **足利学校**(足利市)



日本最古の郷校 **閑谷学校**(備前市)



日本最大の私塾 **咸宜園**

22 江戸時代の私塾－学ぶ自由と教える自由

江戸時代には約3600箇所私塾が確認されている。私塾では教育の方法や入門・卒業等の進退は塾主と塾生の自由意志に任せられていた。



適塾(大阪市)



松下村塾(萩市)

3 日本最大の私塾 咸宜園

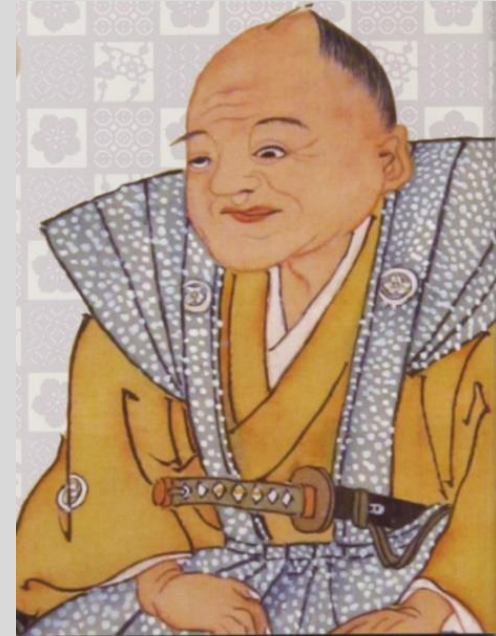


1817年(文化14)、広瀬淡窓が日田に開いた私塾咸宜園には全国から延べ約5000人が入門、近世日本最大の私塾となった。



広瀬淡窓

淡窓は安政3年(1856)まで、約50年間 咸宜園で教えた。優れた漢詩人としても知られる。

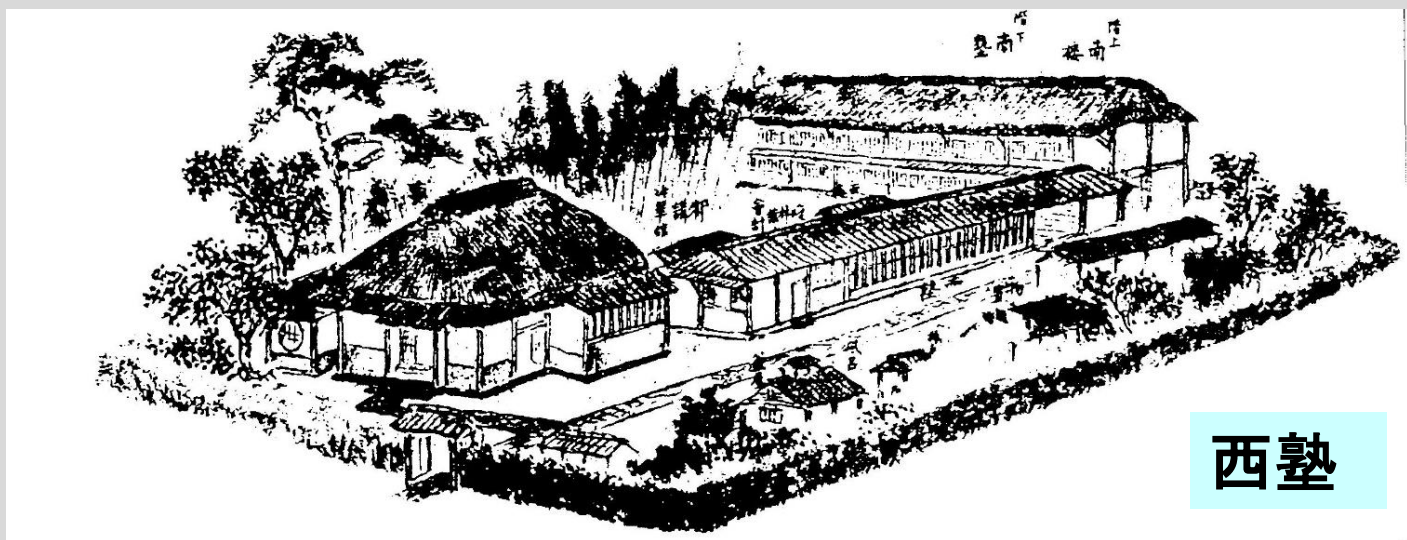


広瀬旭莊

淡窓の末弟。大坂・江戸で塾を開いた。この間諸国を巡遊した。詩人としても著名。

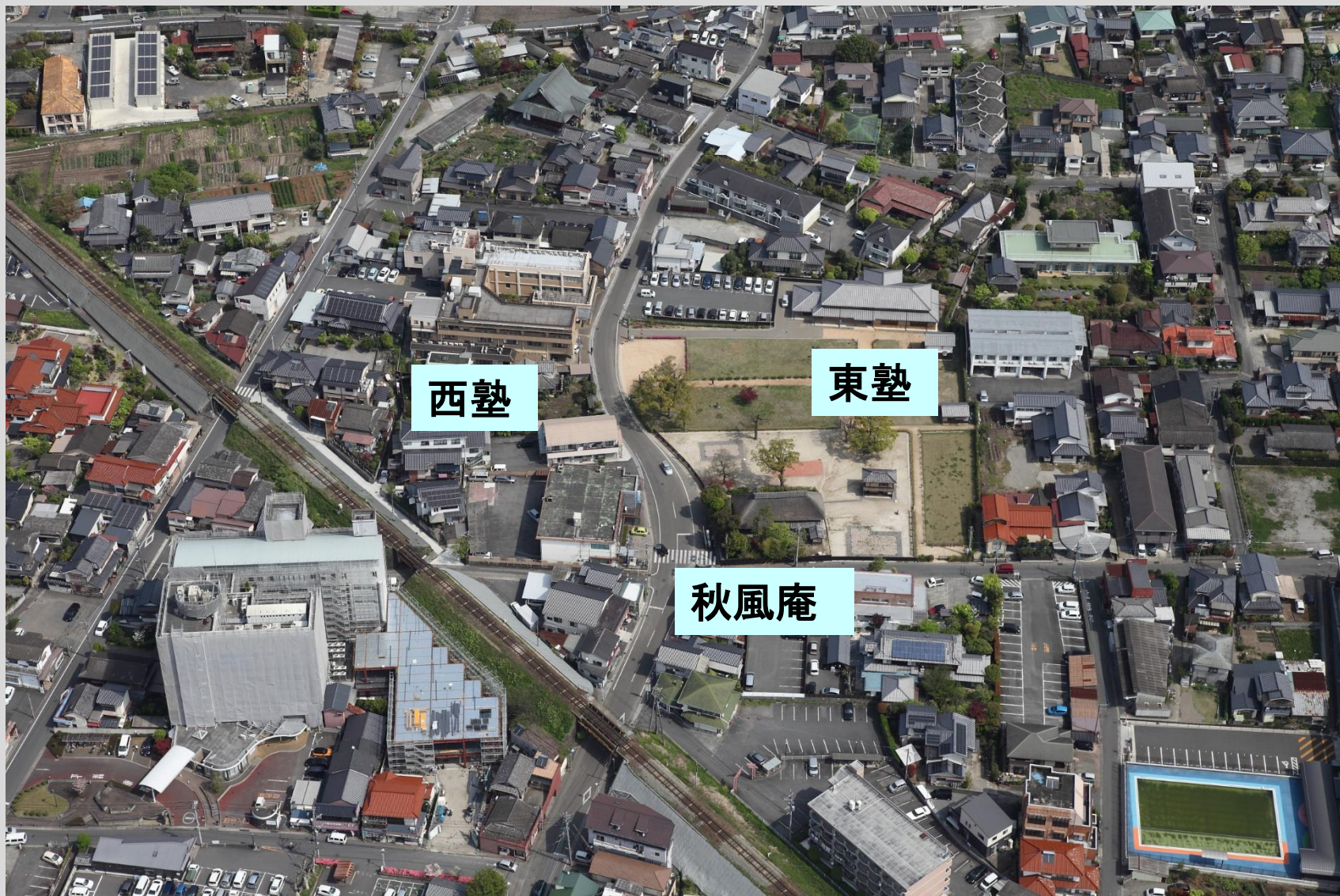


東塾



西塾

咸宜園絵図(広瀬資料館蔵)



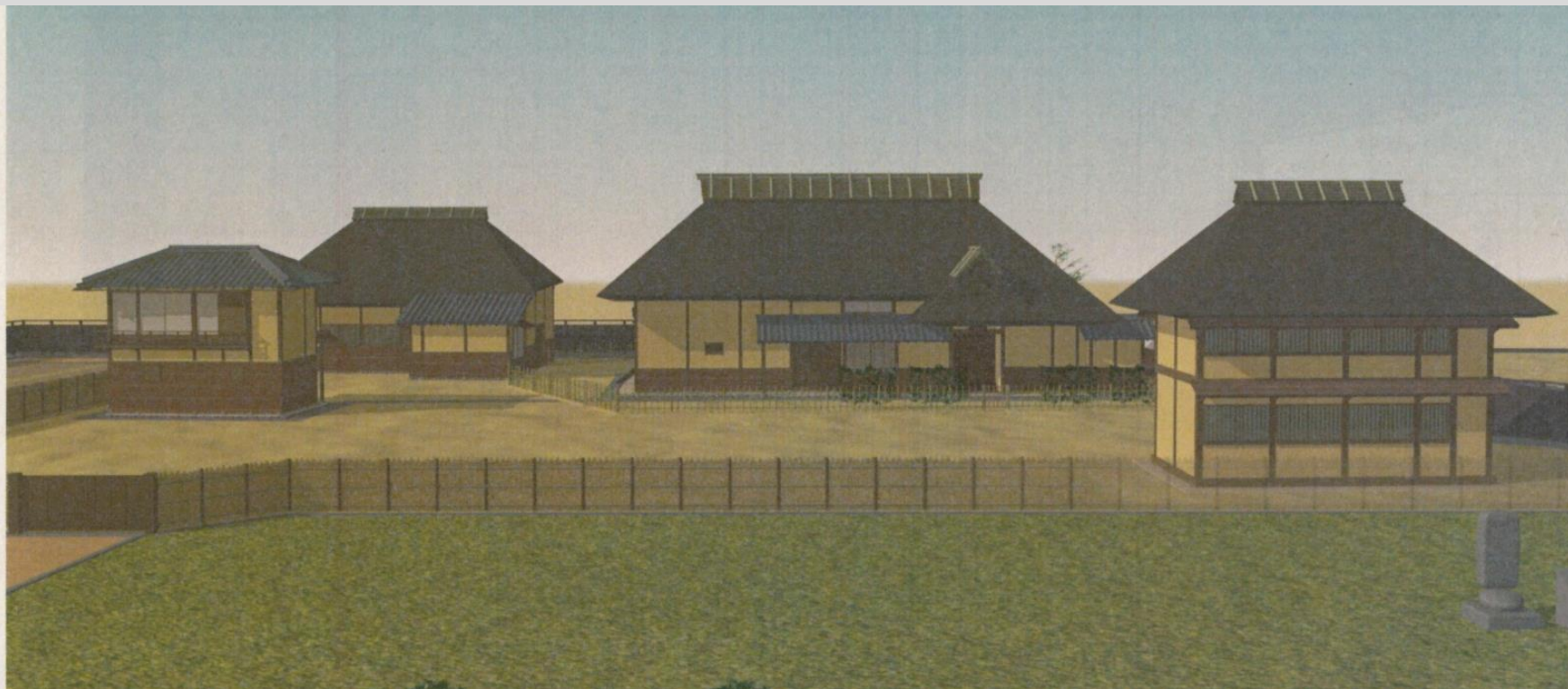
西塾

東塾

秋風庵



史跡咸宜園跡発掘調査状況



発掘調査等で復元される咸宜園のイメージ



永山城跡(月隈公園)・永山布政所跡



豆田町中村家跡発掘状況

あの江戸時代に なぜ「日田の咸宜園」だったのか

- 徹底した**実力主義・平等主義**の教育
- 年齢、学歴、身分を不問とする**三奪の法**
- 月ごとに学習成績を評価・公表する**月旦評**

月旦評

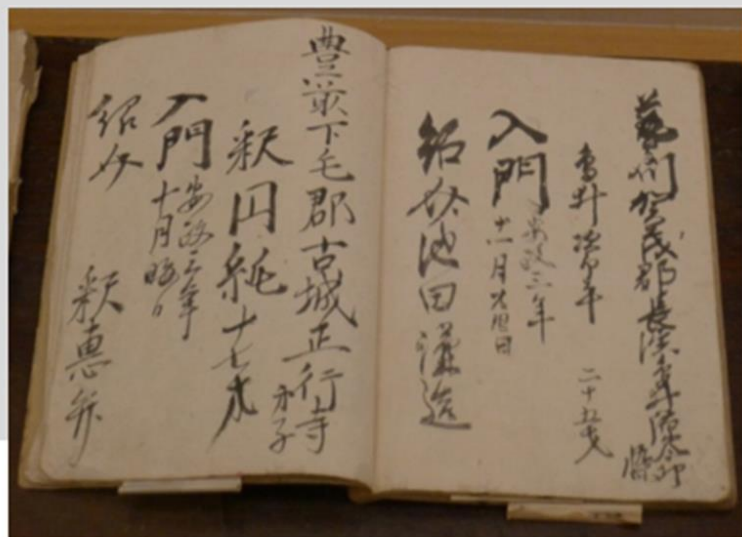
釈普寂（清浦奎吾）

明治4年(1871)の月旦評

九級級級級級級級級級級

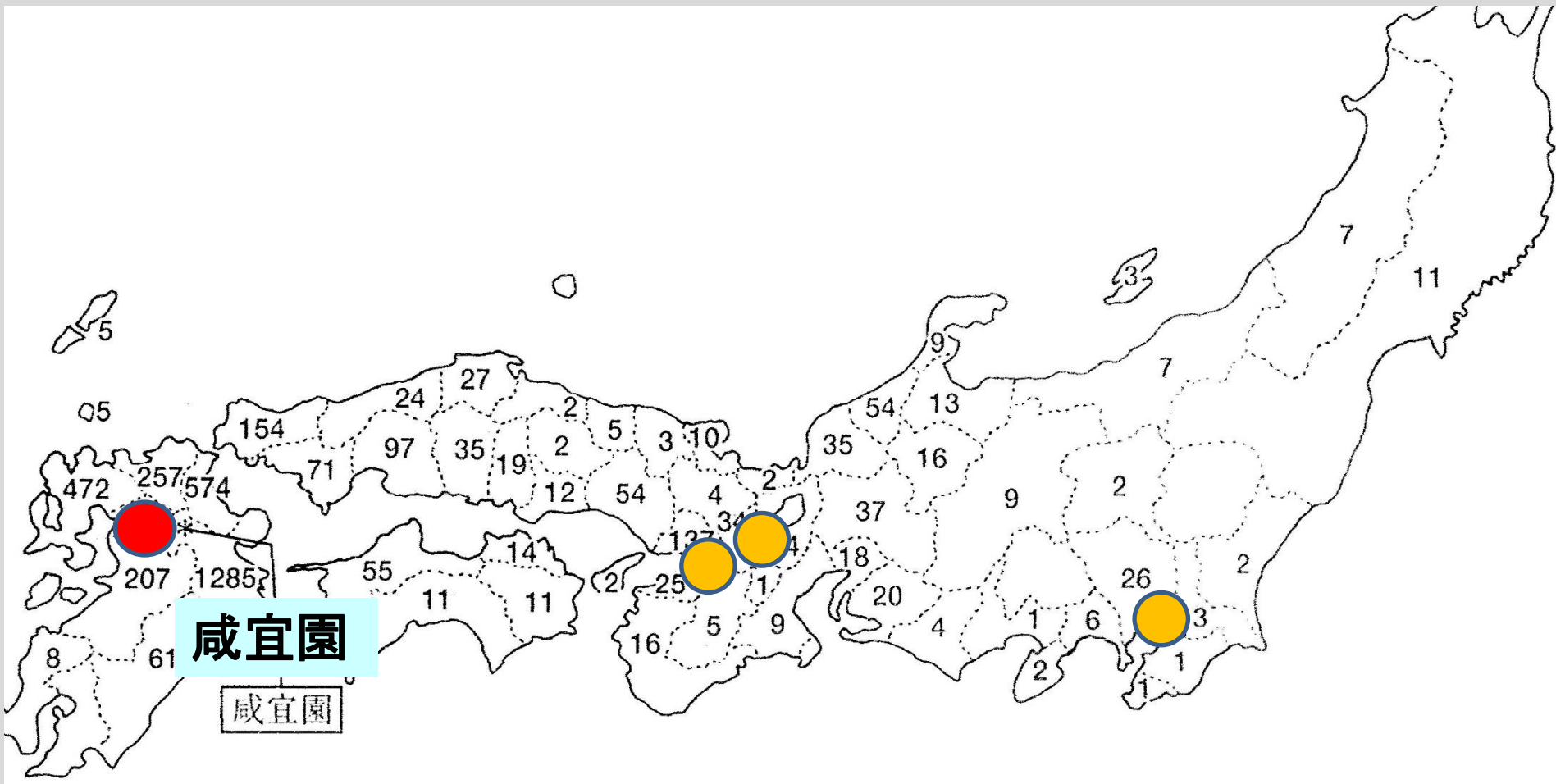
慶応2年(1867)の月旦評

「咸宜園入門簿」の語るもの



通番号	塾長	見出	西洋年	入門年	住所	職業	氏名	続柄	年齢	紹介者	紹介者	巻番号	入門者 記入簿
1	廣瀬 淡窓	入門簿巻一	1801年・6月	享和元年								1	
2	廣瀬 淡窓	入門簿巻一	1801・6・11	享和元年辛酉五月朔 享和二年壬戌二月朔	日田郡隈町		舘林 伊織			兄	清記	2	
3	廣瀬 淡窓	入門簿巻一	1802・3・4	享和二年壬戌二月朔	日田郡豆田町		諫山 安民			水岸寺	密如	3	

淡窓の生家広瀬家には咸宜園の入門簿 約4800通が残されている。



咸宜園入門者の出身地別人員

咸宜園入門簿による入門者の個人別データ

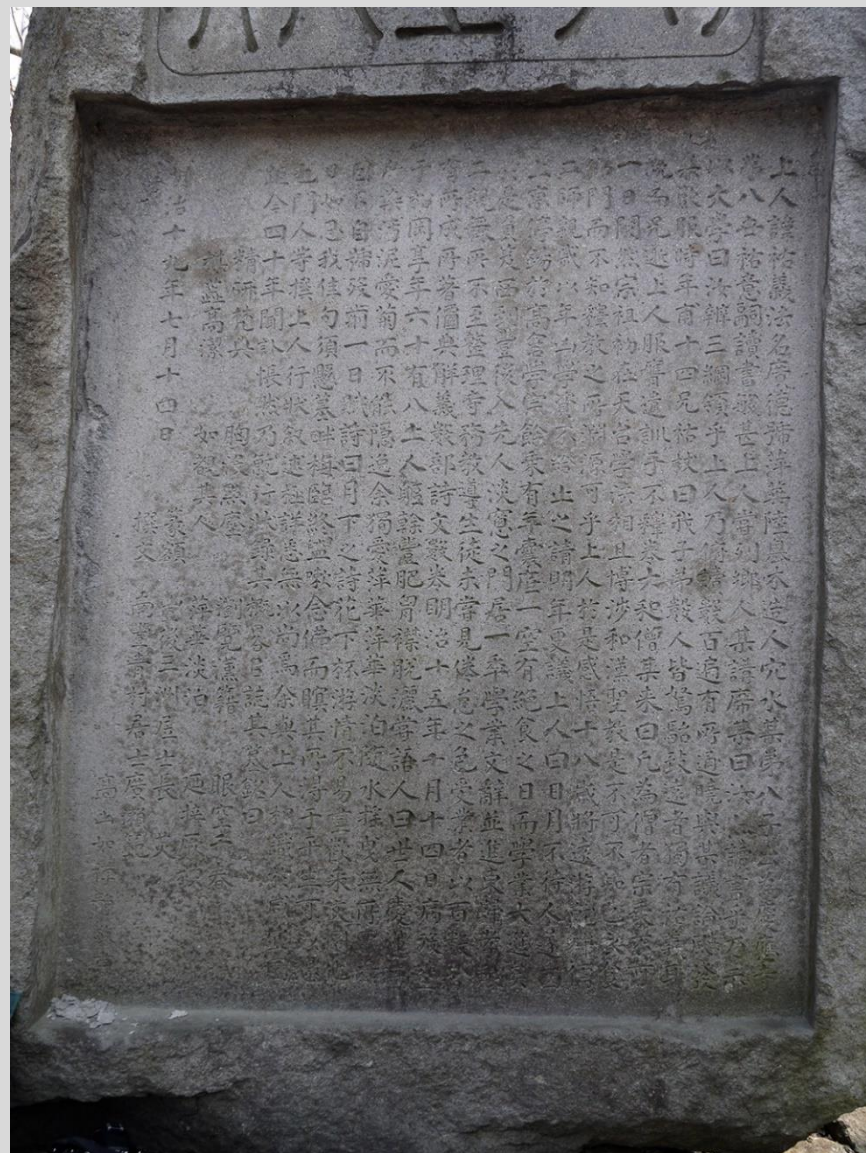
通番号	塾 長	見 出	番 号	入門年	西洋年月日	年1	月1	日1	年2	月2	日2	住 所	旧国名	都	市町村	現市町村名	その他	現都道府県	職 業	氏 名	統 柄	年 齢	age1	紹介者	紹介者	略伝集	宜
39	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	39	文化五年戊辰三月廿九日	1808.4.24	1808	4	24				筑前筑城郡水原色	筑前	筑城郡	水原色			福岡県	長寿寺	豊樹	長寿寺			正法寺大竜			
40	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	40	文化五年三月廿九日	1808.4.24	1808	4	24				筑前筑城郡水原色	筑前	筑城郡	水原色			福岡県	長寿寺	知祥	長寿寺			正法寺大竜			
41	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	41	文化五年辰四月十日	1808.5.5	1808	5	5				豊前仲津郡木井村	豊前	仲津郡	木井村	みやこ町		福岡県	則伝寺	法藏	則伝寺			正法寺大竜		略伝集	
42	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	42	文化五年戊辰四月十日	1808.5.5	1808	5	5				豊前仲津郡木井色	豊前	仲津郡	木井色	みやこ町		福岡県	即伝寺	法露	即伝寺			正法寺大竜		略伝集	
43	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	43	文化五年四月十八日	1808.5.13	1808	5	13				豊前上毛郡安雲村	豊前	上毛郡	安雲村	築上郡上毛町安雲		福岡県	光林寺	点計	光林寺			善達寺通謙		略伝集	
44	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	44	文化五年辰四月十八日	1808.5.13	1808	5	13				豊前小倉寺町	豊前	企救郡	小倉寺町	北九州市		福岡県	明達寺	法山	明達寺			善達寺通謙			
45	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	45	文化三年四月十二日	1808.5.7	1808	5	7				豊後日田郡隈横町	豊後	日田郡	隈横町	日田市隈		大分県		手島 半太良				手島 休安		略伝集	
46	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	46	文化五年辰五月六日	1808.5.30	1808	5	3				豊後日田郡我有木町	豊後	日田郡	我有木町	日田市		大分県		羽野 富門				父 養詢		略伝集	宜
47	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	47	文化五年辰五月廿日	1808.6.13	1808	6	13				筑前福岡	筑前	福岡				福岡県	松源院	大武	松源院徒			良伝		略伝集	
48	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	48	文化三年寅九月八日	1808.10.27	1808	10	27				豊後大分郡府内	豊後	大分郡	府内			大分県	各念寺	静恵	各念寺			頼達寺逸恵		略伝集	
49	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	49	文化五年辰五月十一日	1808.6.4	1808	6	4				豊後府内	豊後	大分郡	府内			大分県	西福寺	大洞	西福寺			静恵			
50	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	50	文化二乙丑八月朔	1805.8.24	1805	8	24				日田郡鶴河内村	豊後	日田郡	鶴河内村	日田市鶴河内		大分県		井上 徳司				館林 伊藏			
51	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	51	文化五戊辰五月廿五日	1808.6.18	1808	6	18				日田郡中島村	豊後	日田郡	中島村	日田市		大分県		石松 操				井上 徳司		略伝集	
52	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	52	文化五年戊辰五月十七日	1808.6.10	1808	6	1				筑前鞍手郡直方町	筑前	鞍手郡	直方町			福岡県		世良 春水				良伝			
53	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	53	文化五戊辰卯月廿七日	1808.6.20	1808	6	2				豊後府内駄原色	豊後	大分郡	府内駄原色	大分市		大分県	光明寺	法海	光明寺			村上 俊民			
54	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	54	文化五年三月八日	1808.4.3	1808	4	3				筑後三池郡藤田村	筑後	三池郡	藤田村			福岡県	光園寺	万慶	光園寺			西光寺 法盛			
55	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	55	文化五戊辰七月廿九日	1808.9.19	1808	9	19				豊後府内	豊後	大分郡	府内			大分県	円林寺	恵眼	円林寺			信妙			
56	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	56	文化五戊辰七月廿九日	1808.9.19	1808	9	19				豊前中津古城村	豊前	下毛郡	中津古城村	中津市		大分県	円林寺	普現	円林寺			順教			
57	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	57	文化五戊辰七月廿八日	1808.9.18	1808	9	18				筑後竹野郡恵利村	筑後	竹野郡	恵利村			福岡県	長念寺	円寂	長念寺			天若		略伝集	
58	齋瀬 淡窓	入門簿巻一	58	文化五戊辰九月五日	1808.10.24	1808	10	24				豊前国仲津郡今井津	豊前	仲津郡	今井津	行橋市		福岡県	浄薫寺	鉄嶺	浄薫寺			満光寺 履中		略伝集	
59	齋瀬 淡窓	入門簿	1		1808年9月	1808	9																				
60	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	2	文化五年戊辰八月三日	1808.9.21	1808	9	21				日田郡斎	豊後	日田郡	斎	日田市		大分県		渋谷 惣三郎				父渋谷幸藏		略伝集	
61	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	3	文化五年十月二日	1808.11.19	1808	11	19				大坂安次川	大坂安次川						南徳寺	慧学	南徳寺			正明寺順教		略伝集	
62	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	4	文化五年辰十二月十五日	1809.1.30	1809	1	3				国東郡田染	豊後	国東郡	田染	豊後高田市田染		大分県	延寿寺	恵上	延寿寺			照蓮寺大周			
63	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	5	文化五年辰八月十六日	1808.10.5	1808	10	5				日田郡豆田町	豊後	日田郡	豆田町	日田市豆田町		大分県		佐野 善太郎				博多屋三郎右衛門		略伝集	
64	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	6	文化六年巳年二月五日	1809.2.20	1809	2	2				筑前上座郡寒水色	筑前	上座郡	寒水色			福岡県		田辺 俊作				松本 主計			
65	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	7	文化六巳年二月六日	1809.2.21	1809	2	21				豊前築城郡松江	豊前	築城郡	松江	豊前市		福岡県	淨円寺	周旭	淨円寺			正法寺大竜			
66	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	8	文化三丙寅年三月三日	1809.4.17	1809	4	17				日田郡中城町	豊後	日田郡	中城町	日田市中城町		大分県	大超寺	大典	大超寺			大超寺孝譽			
67	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	9	文化六巳孟春十日	1809.2.23	1809	2	23				日田郡渡里色	豊後	日田郡	渡里色	日田市渡里		大分県		松本 善市				兄 主計		略伝集	
68	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	10	文化六巳二月九日	1809.3.24	1809	3	24				日田郡石井色	豊後	日田郡	石井色	日田市石井町		大分県		樋口 熊次良				津山 清人		略伝集	
69	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	11	文化六巳巳三月十五日	1809.4.29	1809	4	29				豊前上毛郡中村色	豊前	上毛郡	中村色	豊前市中村		福岡県	景幽寺	界縁	景幽寺			正明寺順教			
70	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	12	文化六年巳巳三月廿二日	1809.5.6	1809	5	6				日田郡名本村	豊後	日田郡	名本村	日田市大肥町		大分県	不遠寺	廣洞	不遠寺			本阿 要人			
71	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	13	文化六年巳巳三月廿三日	1809.5.7	1809	5	7				豊前築城郡越路村	豊前	築城郡	越路村	築上郡築上町越路		福岡県	教法寺	円成	教法寺			正明寺順教			
72	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	14	文化六年三月廿三日	1809.5.7	1809	5	7				豊前築城郡越路村	豊前	築城郡	越路村	築上郡築上町越路		福岡県	教法寺	順道	教法寺			正法寺大竜			
73	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	15	文化六年四月十五日	1809.5.28	1809	5	28				筑前嘉麻郡内山田村	筑前	嘉麻郡	内山田村	築上郡築上町越路		福岡県		杉山 青雲				田島 蘭秀			
74	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	16	文化六年四月十六日	1809.5.29	1809	5	29				筑前上座郡赤谷村	筑前	上座郡	赤谷村			福岡県		原 文雄				田島 蘭秀			
75	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	17	文化六年巳巳五月朔日	1809.6.13	1809	6	13				日田郡隈町	豊後	日田郡	隈町	日田市隈		大分県	照蓮寺	恵澤	照蓮寺			兄 恵雄		略伝集	
76	齋瀬 淡窓	入門簿巻二	18	文化六巳巳年五月四日	1809.6.16	1809	6	16				筑後生葉郡吉井町	筑後	生葉郡	吉井町			福岡県	淨満寺	正観	淨満寺			長念寺円寂		略伝集	

陸奥国からの入門者

通番号	塾 長	入門年	西洋年月日	住 所	旧国名	郡	職 業	氏 名	続 柄	年 齢	age ₁	紹介者
1079	旭 莊	天保二年辛卯九月十一日	1831.10.16	奥州津軽合浦外浜青森	陸奥	津軽合浦外浜青森		来 正悦				山本 清太郎
1635	ひろせ 廣瀬 淡窓	天保十一年庚子三月三日	1840.4.5	奥州仙台北城下	陸奥		臨濟院	古 関	臨濟院	二十五	25	釈 慧眼
1778	ひろせ 廣瀬 淡窓	天保十四年卯正月廿日	1843.2.18	奥州津軽鶴田邑	陸奥	津軽鶴田邑	教願寺	僧 泰音	教願寺	廿七	27	長福寺一位
1862	ひろせ 廣瀬 淡窓	天保十四年癸卯十二月六日	1844.1.25	奥州津軽郡黒石	陸奥	津軽郡		釈 祐音		二十五	25	釈 泰音
2415	ひろせ 廣瀬 淡窓	嘉永庚戌三月二日	1850.4.13	奥州相馬北郷行方郡南石田村	陸奥	相馬北郷行方郡		鎌田 宗元	鎌田軍左夫倅	年廿八	28	末田 直馬
2467	ひろせ 廣瀬 淡窓	嘉永三戌九月廿二日	1850.10.27	奥州仙台	陸奥	仙台		遠藤 道策	遠藤久三郎弟	年廿六	26	鍛冶屋 伊三郎
2695	ひろせ 廣瀬 淡窓	嘉永六癸丑年四月七日	1853.5.14	仙臺宮城郡片岡町	陸奥	仙臺宮城郡		上 埜 董葦	上埜陽山 倅	二十七	27	釈 来鳳
3119	せい 青 邨	安政五年七月二八日	1858.9.5	奥州仙台名取郡茂ヶ崎	陸奥	仙台名取郡	撐月院	北 溪	撐月院 徒	二十四	24	陸州
4700	へんらく 亦樂編	天保十三年壬寅一月廿日	1842.3.1	奥州松前	陸奥	松前	専念寺	独明	専念寺弟子	年四十一	41	山田 三郎
4743	へんらく 亦樂編	天保十五年三月十四日	1844.5.30	奥州松前	陸奥			大友 玄碩		年廿六	26	加藤 善庵
4761	へんらく 亦樂編	弘化二年四月朔日	1845.5.6	奥州磐城平藩	陸奥	磐城平藩		宝 松太郎		年二十八	28	諸木 兵二郎

釈泰音 （青森県）津軽鶴田邑で開塾、鶴田小学校の前身
釈祐音 （同上）津軽木造邑で開塾、同小学校の校長となる。

菊池祐義(釈祐音)の碑(青森県つがる市・慶應寺)



撰文 廣瀬青邨

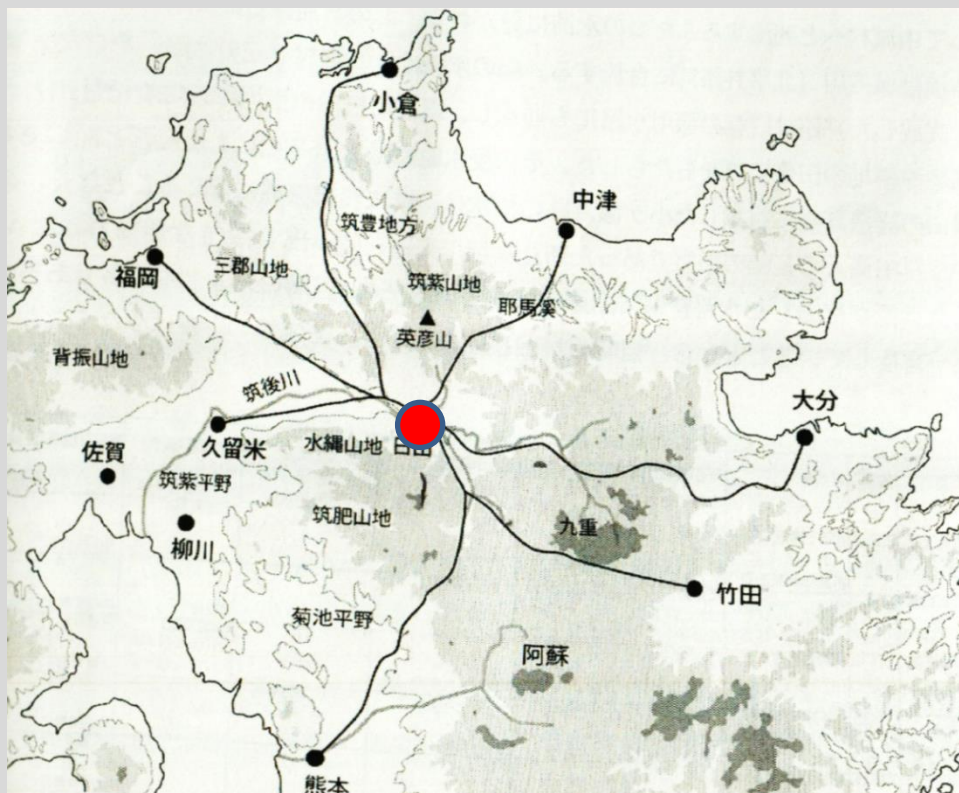
4 咸宜園と学びの町日田

江戸末期の豆田・隈の町はともに人口1000人余り。
一方、咸宜園の入門者は200人を超え、その多くは他
国(藩)からのいわば留学生であった。

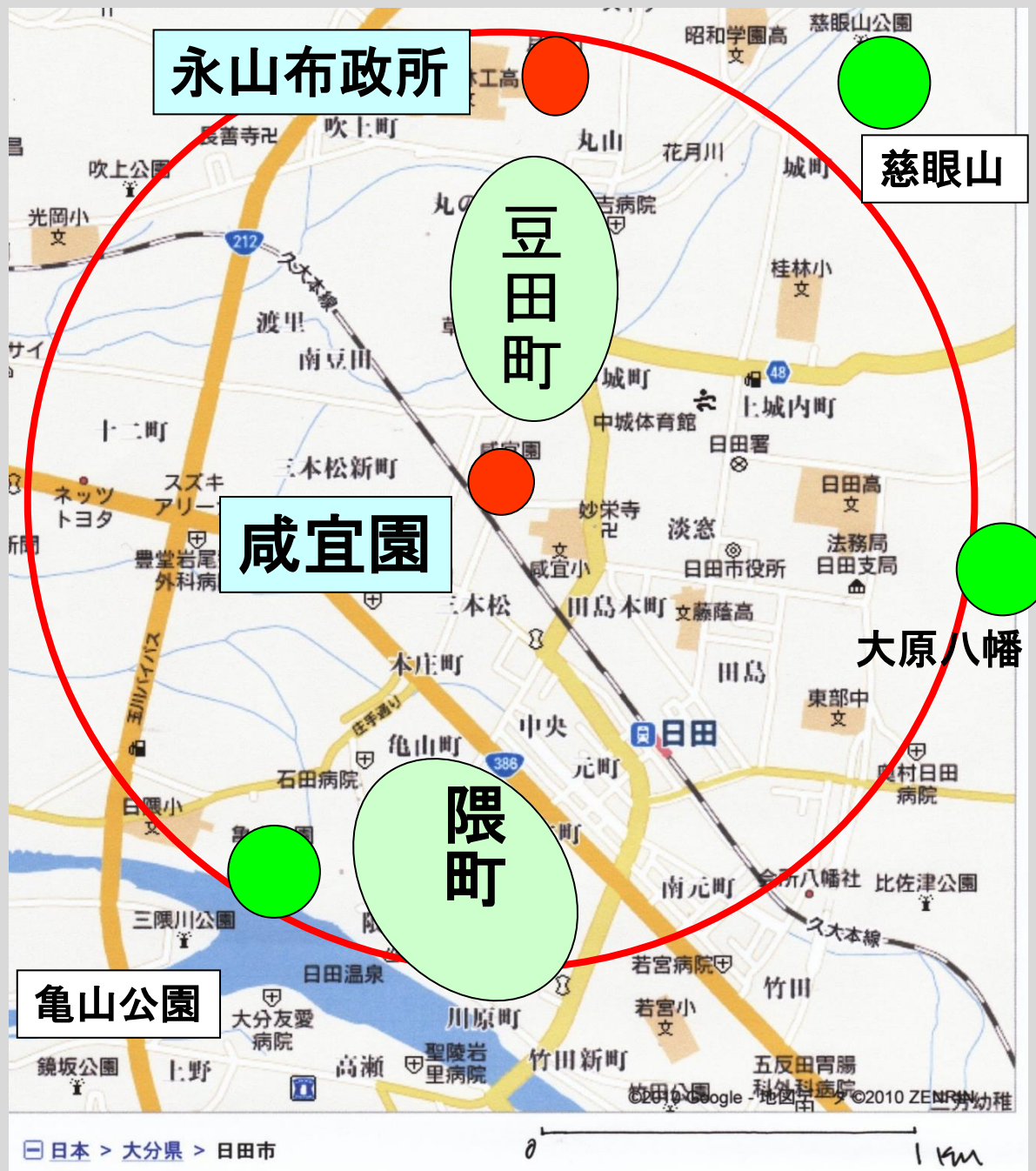
日田の人々は物心両面で咸宜園と塾生たちを支援し、
淡窓はたびたび町家に出かけて講義や詩会を開いた。

日田は多くの留学生たちが学ぶ**学園都市**の様相を呈
していた。

西国筋郡代と日田町の繁栄



日田には西国筋郡代が置かれ豆田・隈町の商家は諸大名の御用達や掛屋として資本を蓄積した。そうした中で日田には独自の文化が育まれていた。





5 淡窓・咸宜園の「放学・遊山」 一日田の野山に遊び学ぶー

咸宜園ではしばしば**放学**し周辺の野山にでかけた。それは日田の風物と旧跡等を塾外のキャンパスとして活かした教育であった。
地域の人々はこの遊山を快く受け入れていた。



咸宜園放学・遊山対象地分布図



6 その詩文で読む淡窓の人間像

史料

1 「哀」と「傷」と

ー亡き父母への思い
自伝『懐旧楼筆記』より

2 雨上がりの別れ

河野鉄兜の随筆より

3 淡窓の詩ー心と風景

「遠思楼詩鈔」より

24.10.27(土)

灯



私塾「咸宜園」の塾主広瀬
淡窓。その母ユイは1812

(文化9)年、48歳で急逝し
た。ユイは18歳で広瀬家に嫁
ぎ、長男淡窓はじめ8男3女
を産んだ。淡窓は、自伝「懷
旧樓筆記」の中で、日田の豪

商広瀬家を陰で支

え続けた母の労苦
を追悼した上で、

母があと3年も生
きていれば、孫も

生まれていた。生
涯、孫というもの

を知らずして逝っ

たことは遺憾の至りだったと
述べている。

一方、淡窓の父三郎右衛門

(桃秋)は1834(天保5)

年、84歳の天寿を全うした。

淡窓はこの時は(母の時と違
い)、家運も上向き、家には

子あり、孫あり、曾孫あり、

兄弟たちの嫁も何人もいた。

孝養なお行き届かずとはい
え、尽くすだけ尽くしたと述
べている。

かくて淡窓はいう。「母の
喪に逢う。傷んで哀します。

父の喪に逢う。哀しんで傷ま
ず」と。要するに母の死には
哀しみより傷み、父の死には
哀しみはあったが傷むことは
なかったというのである。

そしておよそ次

のように述べてい
る。―考(父)が

主で妣(母)が従
というのが儒教の

教えの当然である
が、天寿を全うし

た父よりも、若く

して逝った母を(より深く)
傷むのは人情の必至である。

その両者を並び重んじて誤り
はない―と。

江戸時代を代表する儒学者
にしてこの言あり。淡窓の人
と思想がここに言い尽くされ
ているように思う。

(別府大学名誉教授)



後藤 宗俊

8、27(土)

灯



28、1853(嘉永6)年、漢詩人として知られる河野鉄兜が、日田の私塾咸宜園に広瀬淡窓を訪ねた。鉄兜は播磨国(兵庫県)の人。当時大阪に住む淡窓の弟旭荘と親交があった。

大谷篤蔵著「芭蕉晩年の孤愁」(角川学芸出版)に、この時の咸宜園訪問の子細を記した鉄兜の随筆の一節が紹介されている。

これによれば、鉄兜が見た淡窓の第一印象は瘦せて小柄、ただの一田舎老人という感じだったが、その言動には人を射る「英風」が感じられた。そしてどこまでも謙虚なのだが、それでいて、どこか周りを包み込む「氣」を含んでいたという。このとき鉄兜はおおよそ

別れのりの上雨



後藤 宗俊

1カ月滞在、咸宜園の門弟たちと、共に学び酒を酌み交わした。

そしていよいよ別れの時、あいにくの空模様の中、淡窓は病身にもかかわらず、きっちりとはかまを着けて、玄関に立ち客人を見送った。そして涙を流して言った。

「老病千里ノ隔居、定メテ再会ノ期ナシ。前路、斯文(学問)ノ為ニ自愛シ玉ヘカシ」

—自分は老病の身とて、はるか千里の地に住むあなたに再び会つこともないでしょう。どうか学問の道のためにご自愛ください—と。

身に余る淡窓の厚情に感激した鉄兜は、着衣の汚れるのも構わず、雨上がりの泥中にひさまずいて謝意を表して旅立った。この時、鉄兜29歳、淡窓はその3年後、75歳で亡くなった。(別府大学名誉教授)



桂林莊雜詠

諸生に示す より

道うことを休めよ 他郷苦辛多しと

同袍友有り 自ら相親しむ

柴扉曉に出れば 霜雪の如し

君は川流を汲め 我れは薪を拾わん

隈川雑詠五首より

江上の数峰 画屏の如く
家家争い引いて 窓櫺に入る
豪奴惜しむにあらず 千金の価
買い難し 亀山半面の青



歳暮

「遠思楼詩鈔」より

燈は残りて 半壁明るく
人少くして 連窓閉ざす
書童 還た眠らず
相話す 故郷の事



おわりに

一淡窓についての「中央」と「地方」

- 淡窓は生涯を日田に生きた。
- **中央**に対する**地方**という意識はほとんどなかった。
- 「地方」にあることのハンディとアドバンテージと